

ホンジュラス

プロジェクトサイトであるオランチョ県との人口は約 42 万人（2001 年センサス）で 15 歳以下の人口が 43% を占め、70% が僻地に住んでいる。県庁所在地であるフティカルパ市は首都のテグシガルパより東へ 165km に位置し、人口は約 8 万 5 千人。オランチョ県はホンジュラス国最大の面積（24,350km²）をもち、その多くを山が占めている。林業と酪農が主要産業であるが、一般に貧しく識字率は低い。

オランチョ県には保健地域事務所を頂点に、4 つの地区事務所と 150 の保健センターがある。このうち医師あり保健センター（CESAMO）が 23 で残りが准看護師がいる保健センター（CESAR）である。前者には医師の他に、准看護師（1～2 名）、検査技師（10 箇所のみ）、環境衛生技師が配属されている。同地域には 2 次医療を担当するサンフランシスコ病院（1991 年日本の無償資金協力により建設）と 5 つの母子クリニックがある。サンフランシスコ病院は 100 床あり、医師 33 人（産婦人科医 6 人）、正看護師 19 人、准看護師 94 人であり、手術室と血液銀行を備えている。母子クリニックは医師またはインターン医（1～3 人）、正看護師またはインターン看護師（1 人）、准看護師（6～7 人）がおり、正常分娩のみを扱う。保健従事者は約 590 人、そのうち医師 72 人、正看護師 36 人、准看護師 259 人、検査技師 14 人である。

プロジェクト開始前のリプロダクティブヘルスの状況は、1999 年のデータによると、生殖可能年齢女性の死亡は 107 件の登録があり暴力による死亡が 1 位である。これは、オランチョ県の一つの特徴とも言える。この年の妊産婦死亡は 7 件が登録されているが、その前後の 1998 年と 2000 年はそれぞれ 18 件と 14 件であった。年間の分娩数は約 1 万 3 千件でそのうち約 4,600 件がサンフランシスコ病院、約 900 件が母子クリニックで行われていた。また、合計特殊出生率は 5.97 で全国平均の 4.44 を大きく上回っており、このうち 2.10 が望まない妊娠で他の地域よりも多い。

典型的な 1000 人の村の状況はつぎのようである。保健センターは村の中心に 1 ヶ所あり、水道はあるものの電気はない。また、水道の質が悪く、下痢が多いという。スタッフは、医師が 1 名、准看護婦が 1 名いるが、医師は、車で 3 時間離れている首都に自宅があり、週末は帰宅するため、月曜日や金曜日は、来ないことも多く、その場合は、准看護婦が診療にあたっている。疾患としては下痢、マラリア、結核も多いという。また、中央の薬剤配給倉庫の車が不足しているため、保健センターの薬剤の中央からの供給が 6 ヶ月に一度であると共に、不十分なため、病気の際に薬局で売っている高価な薬に頼る住民も多い。

村には保健ボランティアが、住民らの保健教育等をしているという。

宗教は、キリスト教が 80% をしめ、あとは、無宗教である。結婚形態としては、正式に登録しているものが 50%、あとは Free Union という社会的な結婚形態（日本でいう同棲より、かなり社会的には結婚していると認識されているものの、別れた場合にパートナーの扶養に責任はない）が 50% であるとよみに、家族あたり、平均 6 人の子供がおり、16 歳以下の若年妊娠も大きな問題とおり妊娠した場合には、中学校をやめさせられる。また、分娩は、自宅分娩が 70%、その他の場合は、県庁所在地の親戚に泊まり、県病院での施設分娩を行う。自宅分娩は、読み書きが出来ない伝統的産婆が実施していることもあり、清潔なお産がされていないため、妊産婦死亡率も高いと想像される。また、この地域は、昔から、ホンジュラスの西部と呼ばれ、「拳銃をもち、馬に乗る」ところであると共に、アルコールの消費量が高く、気性が激しいことから、他殺が多く、国内の他地域からは恐れられている。この村の、死亡率も他殺が一番である。

主な保健指標

	A 村	首都	日本
乳児死亡率（1000 乳児）	120	30	2
妊産婦死亡率（10 万出生）	200	100	6
合計特殊出生率（子供の数）	6	3.5	1.3